の境界に近く、その加賀なりや越前なりやすら殆ど不明確であつたことは、當時本寺が加州吉崎殿と呼ばれもしたのでも知られる。蓮如がこゝに建造の事に從ふや、縮白忽ち來集し、山を崩し築地を設け、坊舍を建て多屋を構へ、遂に南大門・北大門の稱すらあり、門徒は之を崇んで御山と呼んだ。吉崎の部落が、今日の如く加賀・越前に跨るは、實に兩國土民の集合建設した所であるからである。

(六)門下—蓮如が吉崎に在つた間に化導した門弟に就いては詳しく知るを得ぬ。之を本願寺通紀によつて見るに、その門下に名を列するものゝ中には、加賀菅生の願將(願生)・小松長圓寺の了珍あるばかりである。その他田上の了宗・福田の乘念も加賀人なるべく、專光寺の慶念に至つては全くその名を記してないが、現に金澤なる同寺に、文明五年十二月蓮如が吉崎の多屋に與へた消息を傳へるから、亦加賀の多屋の一つであつたと思はれる。

(七)吉崎坊舍の燒失—坊舍建設以後文明五年に至るまでは極めて順調なる發展をなし來つたが、蓮如が此の年九月、雜輩の吉崎に居住するを謝絕するの宣言を爲すに至つて、突然頓挫を來した。その理由は、求道者以外の四民が群棲することは、何等の利益なきのみならず、吉崎の急激なる發展は世の視聽を惹き、隨うて越前の豐原・平泉、加賀の白山等、台嶺の子院末寺をして漸く嫉視せしめるに至つた爲であつた。況や門徒等が他宗の迫害を防ぐ目的を以て、要塞を構へ土工を起すにこれ日も足らざる狀を見るに至つては、消極を喜ぶ蓮如の堪へ得ざる所であつたから、彼は一たび越前藤島の方面に脫出したのであつたが、吉崎の膨大を喜ぶ多屋輩に引戻されすらしたのであつた。此くの如く蓮如の心機一轉した際、更に不幸なことには、翌六年三月廿八日南大門の多屋から火を失し、本坊以下九棟の多屋を失したのである。

(八)加賀巡敎—蓮如は吉崎に在る間に、屢加賀に入つて巡敎したことであらうと思はれ、その御文中には、『文明第五九月下旬第二日至于巳之刻、加州山中湯治之內書集之訖。』と書いたのもある。又文明七年にも、河北郡二俣の本泉寺に留錫して、庭園を築き樹石を置いて消閑した。越登賀三州志に本泉寺のことを記して、『寶德中に、蓮如三ヶ年居住あり。其遺跡今尙存す。』といへるはこの造園をさすものであるが、蓮如は寶德中にも暫く二俣に杖を曳いたにしても、その土木を弄したるは文明第七に在りとする蓮悟の遺德記を正しとする。

(九)吉崎退去—是より先、越前の朝倉敏景は、その政敵を掃蕩して、一國の守護たる地位を確保したから、蓮如が敏景の政權に依賴して安全の地位を得んとしたことを企てたのは最も自然の成行であつた。されば文明七年三月敏景は蓮如に吉崎御坊の再建を勸告し、用材を己の領內に募緣することを許したので、蓮如は蓮崇を使者として大野に至らしめた。然るに蓮崇は敏景の弟經景と碁を圍んで爭論したから、經景は怒つて平泉寺の衆徒を誘ひ、吉崎を滅さんとの謀を廻らした。この事幸に藤島超勝寺の知る所となり、未だ發せざるに先だつて蓮崇に告げ、彼をして難を加賀に避けしめ、蓮如も亦八月下旬吉崎を去つた。而して經景は九月五日吉崎を攻め、殘留した多屋坊主を悉く驅逐した。蓮如が退去の理由は上述の如くである。然るに世人その原因を以て、富樫政親の襲擊に歸する者が多い。曰く、政親初め專修寺門徒に黨して、本願寺門徒を壓迫したから、彼等は吉崎に至り、蓮崇の援を得て政親の居館を侵さんと謀つた。政親之を偵知し、直に兵を率ゐて吉崎を襲ひ、蓮如以下をして皆逃亡せしめ、更に進んで藤島の超勝寺に放火したと。この事は前人既に誤傳なることを疑うてゐる。その故は、文明七年に在つては國中既に本願寺黨の勢力隆々としてゐたこと、白山宮莊嚴講中記錄の明記する所であるから、政親は本願寺黨の首領たる富樫泰高の領土を通過して、吉崎攻擊に從ひ得る理由がなく、更に況や天嶮九頭龍川を超えて藤島を却掠することを得ないといふにある。蓮崇が門徒を勸めて政親に反噬せしめたことは、蓮如上人御法語の記する所であるが、之によつて政親が吉崎を襲擊する結果を惹起したとは信ぜられぬ。

(十)加賀門徒の破門—長享二年六月加賀の本願寺門徒は富樫政親を滅した。曾て俗權と衝突して苦楚を嘗めさせられた蓮如の之を喜ばなかつたこと勿論である。蓮如が七月四日附を以て、『於諸門下企惡行之由其聞在之、言語道斷之次第也。所詮向後於如此之致張行輩者、永可放聖人之御門徒、此趣堅可有成敗者也。謹言。』と記したる所謂お叱りの御書は、金澤の專光寺にも七尾の光德寺(當時在河北郡)にも藏せられるが、果然その危惧は事實となつて現れ、將軍足利義尙は寵臣を殪した門徒の非行を憤り、蓮如に之を義絕することを命じた。而して後年是等土民の破門を宥免せられることを得たのは、細川政元の蓮如と將軍の間を調停したに因つてゞあつた。

レンニヨキ　蓮如忌　藩政の時、三月廿五日所々の眞宗寺院に蓮如上人忌を行うた。この日越前吉崎及び河北郡二俣本泉寺・若松專德寺に參詣する者が多く、遊山も盛に行はれた。今は四月廿五日を以てする。

レンニヨシヨウニンイトクキ　蓮如上人遺德記　一册。大永四年本泉寺蓮悟の著で、天文二年願得寺實悟の書き繼いだもの。本願寺蓮如が眞宗を興隆せしめた事實を記する。

レンニヨヅカ　蓮如塚　石川郡四十萬の善性寺門前から、東へ山を登つた所に、蓮如上人分骨の塚と稱するものがある。加賀古跡考に、蓮如塚はこの村の上に在つて、信仰の人人土を盛り石を積んで今は奇麗に拵へてあり、この地は大聖寺・小松から能登まで見渡す佳景であると記する。

レンノウ　蓮能　能登の人畠山治部大輔政榮の女、大隅家俊の姉で、本願寺蓮如最終の室であつた。文明十二年十六歲で法華經六部を書寫し、能登の大社六ヶ所に納め、十八年廿二歲の頃から蓮如に侍し、明應八年蓮如の示寂した時には三十五歲であつたが、落飾して眞如院と號し、永正十五年九月三日五十四歲を以て歿した。妙祐・實賢・實悟・實順・實孝・妙宗・實從は皆その子女である。

レンノウ　蓮能　童名光玉、公名大藏卿、法名蓮能。蓮誓康乘の子で、江沼郡山田光敎寺二代であつた。文龜三年正月廿二日寂、廿二歲。

レンプクジ　蓮福寺　金澤淺野町に在つて、眞宗東派に屬する。